

麻酔を受ける方へ

大阪市立大学医学部附属病院 麻酔科

麻酔とは手術が行われている間の痛みをとりのぞき、全身の状態を管理することです。本院では麻酔科医が麻酔を担当します。麻酔科医は、安全な麻酔をおこなうようにつとめ、患者さまに異常がおこったら、必要に応じて処置・投薬・点滴・輸血を行います。麻酔を行うにあたって、全ての患者様の静脈に点滴(カテーテル)をとります。場合によっては動脈や太い静脈(内頸静脈・大腿静脈・鎖骨下静脈)にカテーテルを入れることがあります。いずれも安全な麻酔を行うために必要ですが、まれに周囲の血管、神経、臓器が損傷し、追加の検査・処置・手術を必要とすることがあります。

全身麻酔

患者さまの意識がないあいだに手術がおこなわれます。麻酔の薬を注射するか、マスクで麻酔ガスを吸うと患者さまは意識がなくなり呼吸が止まります。ノドに管を入れて肺に酸素を送ります(人工呼吸)。手術中に麻酔が醒めないように、この管から麻酔ガスを送ります。手術が終わって麻酔ガスを止めると患者さまは目が覚め、呼吸が回復します。血圧や呼吸が安定したらノドの管を抜きます。十分に麻酔が醒めたことを確認してから病棟に帰っていただきます。麻酔の回復に時間がかかる場合や、血圧や呼吸が安定しない場合は、いったん、集中治療室(ICU)に入らせていただくことがあります。

全身麻酔の危険性

麻酔による死亡や植物状態は数万人に一人の割合でおこります。麻酔中に心臓発作や脳卒中がおこったり、薬などでアレルギーがおこることがあります。足の静脈にできた血のかたまりが肺の血管につまることがあります。また非常にまれにですが、悪性高熱症(麻酔中に高い熱が出て命に関わります)がおこることがあります。高齢の方やタバコを吸う方は手術の後に肺炎を起こす危険性が高くなります。ノドの管のため、歯が欠けたり抜けたりすることがあります。ノドの管の刺激でノドが痛くなったり声がかすれたりすることがあり、ほとんどは数日で治りますが、まれに数週間以上続きます。手術の後に吐き気がおこることがありますが、ほとんどは翌日におさまります。患者さまの状態や手術の種類によっては、その他のさまざまな異常がおこることがあります。

こうまくがいますい
 硬膜外麻酔

せぼね こうまくがいくう くすり い しんけい まひ
背骨の硬膜外腔に薬を入れ、神経を麻痺させます。

よこむき せぼね ま はり さ ほそ い
横向きになって背骨のすき間に針を刺し、細いチューブを入れます。チューブに麻酔の薬を入れて
しゅじゅつちゅう いた しゅじゅつ あと いた ど つか
て手術中の痛みをやわらげます。チューブは手術の後の痛み止めにも使います。

こうまくがいますい きげんせい
硬膜外麻酔の危険性

かんじゃ はい こうまくがいますい き
患者さまによっては、チューブがうまく入らなかつたり硬膜外麻酔がうまく効かないことがあります、
ばあい ほか ほうほう いた おさ こうまく やぶ ずつう
その場合は他の方法で痛みを抑えます。硬膜が破れて頭痛がおこることがありますが、ほとんど
すうじつ なお てあし たいかん しんけいしやうがい しぜん
は数日で治ります。手足や体幹のしびれといった神経障害がおこることがあり、ほとんどは自然に
なお なが のこ とちゅう き たいない のこ
治りますが、まれに長く残ることがあります。チューブが途中で切れて体内に残ることがごくまれに
かんじゃ じやうたい しゅじゅつ しゆるい ほか いじやう
あります。患者さまの状態や手術の種類によっては、その他のさまざまな異常がおこることがありま
す。

せきついますい ようついますい
 脊椎麻酔(腰椎麻酔)

せぼね まくかくう くすり い かはんしん しんけい いちじてき ま ひ せきついますい しゅじゅつちゅう
背骨のくも膜下腔に薬を入れ、下半身の神経を一時的に麻痺させます。脊椎麻酔では手術中
いしき よこむき せぼね ま はり さ ますい くすり い あしさき うえ
に意識があります。横向きになって背骨のすき間に針を刺し、麻酔の薬を入れます。足先から上
む ひろ ますい き じかん しゅじゅつ おこな しゅじゅつ あと
に向かってしびれが広がり、麻酔が効いている2～3時間に手術を行います。手術の後、しばらく
あいだ あんせい
の間はベッドで安静にします。

せきついますい きげんせい
脊椎麻酔の危険性

かんじゃ せきついますい き ばあい ぜんしんますい おこな
患者さまによっては脊椎麻酔がうまく効かないことがあります、その場合は全身麻酔を行いま
こきゅう よわ けつあつ さ ちりやう すうじつかん ずつう
す。呼吸が弱くなつたり血圧が下がることがありますが、すぐに治療できます。数日間、頭痛がおこ
ることはありますが、ほとんどは自然に治ります。足のしびれなどの神経障害がおこることがあり、
しぜん なお なが のこ かんじゃ じやうたい しゅじゅつ しゆるい
ほとんどは自然に治りますが、まれに長く残ることがあります。患者さまの状態や手術の種類によ
ほか いじやう
っては、その他のさまざまな異常がおこることがあります。

ちゅうい
 注意

カゼをひくと手術は中止又は延期となることがあります。体調を崩したらすぐに主治医に報告して
しゅじゅつ ちゅうしまた えんき たいちやう ぐず しゅじい ほうこく
ください。食後に麻酔をすると食べ物か肺に流れ込みます。手術当日は絶対に食事をとらないで
しょくご ますい た もの はい なが こ しゅじゅつとうじつ ぜったい しょくじ
ください。飲み物(水又はお茶)は決められた時間以降は飲まないで下さい。
の もの みずまた ちゃ き じかんいこう の

お願い

だいがくびやういん しんりやう きやういく い がくけんきやう びやういん ますい かせんもんい
大学病院は診療をおこなうだけでなく、「教育」や「医学研究」もおこなう病院です。麻酔科専門医
しどう けんしゅうい ますい い がくせい かんごがくせい じっしゅう
の指導のもとで研修医が麻酔をしたり、医学生や看護学生が実習をすることがあります。また、
こじんじやうほう ほ ご じゅうぶん はいりよ ますい きろく けんさ けんきやう はつびやう しりやう
個人情報保護に十分に配慮して、麻酔の記録や検査のデータなどを研究や発表の資料とし
しょう しばい りかい きやうりよく ねが
て使用させていただく場合があります。ご理解とご協力をお願いいたします。